

## 報佛寺の身代り名号



報佛寺の身代わり名号 1



報佛寺の身代わり名号 2

真宗における本願他力の肝要を簡明にまとめている『歎異抄』の著者である唯円は、大部（現在の水戸市飯富町）の平太郎の弟で俗姓北条平次郎則義と報佛寺伝には伝えられている。その平次郎が親鸞聖人の門弟となり唯円と名乗るに至った経緯を伝えているのがこの「報佛寺の身代り名号」の段である。報佛寺『平次郎女房身代り名号略縁起』によれば、平次郎は「慳貪邪見にして因果の道をしらず常に殺生を好みてものの命をとり放逸無慚の悪人」であったという。しかし、その妻は親鸞聖人の教化を受け深く帰依した「厚信無我の信者」であり、夫の目を忍んで稲田にある聖人の草庵へ度々参詣していたある時、夫が一遍の念仏も称えない仏法誹謗の者であることを嘆き涙ながらに聖人に訴えると、聖人はその志の深いことを感じ取られて、十字の名号を書き与えられ「今与る処の名号は名体不離の御姿なれば夫に隠して大切に敬べし仮令参詣は致さずとも億念の信常にして信ずる心の変ねば摂取の利益疑なし必ず夫に逆はず深くご慈悲を喜べし」と述べられたと言う。妻は歎喜の涙とともに帰宅し、名号を箱の中に隠し夫に見つからぬよう夫の留守を見計らっては取り出し香花燈明を供えて一心に念仏申していた。ある日の夕暮れ時、妻がいつものように念仏している最中に夫の平次郎が帰宅した。平次郎は妻が書に向かって余念なく一人言を述べている姿を覗き見ると、妻が男性からの恋文を読んでいるに違いない

と忽ちに勘違いし、慌てふためきながら名号を懐にしまい込み逃げ出そうとする妻を追い、山刀で妻の肩先を斬り込んだ。息絶えた妻の遺体をこもに包んで竹藪に埋めた平次郎が家に戻ってみると、不思議にも妻が部屋の中から出迎えに出て来た。驚いた平次郎は先ほどまでの出来事の子細を妻に語り、妻が自分の懐を確

認するとしまい込んでいたはずの名号が見当たらない。不審に思った平次郎が遺体を埋めた竹藪の中の土を掘り返してみると、土の中から出てきたのは血潮に染まった「帰命」の二字より袈裟がけに斬られた「帰命尽十方無碍光如来」の十字名号であったという。その後の経過について『略縁起』には次のように記してある。「爰に夫平次郎は黙念として居たりしが宿善の時至りけん、双眼に涙を浮め膝まつき両手を合せて伏し拝み南無阿弥陀仏と称へしが持ちたる刀を取なおし我鬚を押切て女房に打向い、扱其方は女ながらも我為には大善知識なり、是迄は仏も鬼もなきものと悪口誹謗致せしは遁れがたき地獄の大罪、而るに今かかる不思議に逢ふことは是我発心の時至れりかかる尊き御名号を刀にかけて勿体なや五逆の罪の恐しや何卒免したまはれよと平次郎は後悔の涙止らざりけり。それより夫婦打連れて稲田の御庵室へ参詣致し事の由を申上げれば、聖人聞召てのたまはく、抑抑この十字の御名号は悪逆の衆生を捨てずして普く光明に摂し給う徳号なれば左こそあるべし、是即ち悪人女人往生証拠の名号なり大切に尊敬すべしと、懇に御教化下さりければさすがの大悪人平次郎立処に改心懺悔して御弟子となり唯円大徳と申す。真宗安心の規範を顕し九十六才にして往生の素懐を遂ぐ。」

※括弧内文字は『平次郎女房身代り名号略縁起』原文